

---

# 異世界日記（仮）

雨流 光希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界日記（仮）

### 【Nコード】

N8233Z

### 【作者名】

雨流 光希

### 【あらすじ】

俺こと、一雙翔太<sup>いちそうしょうた</sup>は現実に絶望していた。  
大学受験を間近に控え、受験勉強を必死に頑張っていた俺へ届いた悲報。

両親が事故にあい他界したと。

だが、悲劇はそこで終わらなかった。

両親の遺産目的に群がった善人ヅラした親戚達。

法律の事など詳しく知らない俺は、親戚達の口車に乗せられ、住む

家さえ奪われる。

心身共に弱っていた。

そんな俺の前に、自称神の一人の女が現れる。

女からの誘いはこの世界に絶望した俺に断る理由は見当たらなかった。

## 底辺からの逃亡

夜の闇に包まれた街だが、まだまだ眠りにつくには早いと言わんばかりに街には光が溢れていた。

街灯、車、コンビニ、看板。そして、クリスタスイルミネーション。光源となる物に不自由はしない。また人が途切れも無く歩いている。普段なら会社帰りの人が半数以上だが、今日はいつもとは違った。

今日はクリスマス。イブに会えなかった恋人達、クリスマスを祝う親子連れ。街全体が浮かれ、街ゆく人は、大多数が幸せそうに笑っている。

そんな中、肩を落とし力無く歩く少年、いちそうしゅつた一雙翔太も去年まではその輪の中にいた。

毎年行われていた家族三人によるクリスマスパーティー。パーティーと言ってもクリスマスツリーを飾り、母親の作った料理を食べるささやかな物だった。

だが、今年からは永遠にそのパーティーが開かれる事は無い。

一週間前の事故から、彼のこの世界での人生の歯車は原型をとどめない程、壊れてしまった。

両親の死の悲しみに浸っていると、親戚が押しかけ、いろいろな書類にサインをさせられた。

そして今日、サインをした書類を持った弁護士にこう言われた。

「この家はもう貴方の物ではありません。今すぐに出て行ってください」

翔太は理解した。嵌められたと。

嵌められたと気付きはしたが、即時退去させられる事には疑問を持たない。両親を失い、親戚の裏切りに会い、思考能力が極端に低下していたからだ。

力無く歩き続け、翔太は街の雰囲気から逃れるように、市民公園の中に入る。

市民の憩いの場として作られ、ジョギングコースや、大きな滑り台のついた高さ20m程のロケット型の遊具。夏にプールとして使用されている場所は、今は蓋をされテニスコートになっている。

朝にはジョギングをする人や、犬の散歩をする人で賑わい、昼は子供たちの声が途切れなく聞こえ、夜にはカップルなどが話す場として利用する人気の公園だったが今日ばかりは人影が見当たらない。カップルに人気の公園でも今夜ばかりはクリスマスイルミネーションに軍配が上がった。

「はー」

街の光の届かない公園の奥の方まで歩いてくると、翔太はベンチに腰を下ろした。ベンチはとても冷たかったが今の翔太にとっては些細な問題だった。

今まで甘やかされていたとまでは行かないが、普通の生活を送っていた翔太には、これからどう生きていけば良いのかあてがない。厳密に言うところの世界で生きて行くのが嫌になっていた。

今の翔太を見た者は、「何を甘えた事を考えているんだ？世界にはお前より不幸な境遇の奴がいるんだ」と翔太を叱るかも知れない。

当たり前のように送っていた生活が、急に壊れる者の気持ちがかかる者なんて滅多に居ないだろう。

「ね。君」

不意に女性に声を掛けられる。翔太は顔を少し上げるが、自分に声を掛けてくる者は居ないと直ぐに視線を下に戻す。

「無視しないの」

少しいじけた様な女の声がし、首に何か暖かい物を置かれた。翔太は手にとって見ると缶コーヒーだった。

視線を缶コーヒーを置いた女に向ける。身長160センチ程で、メリハリのある身体つきに、巨乳ではないが、整った胸元を強調するかの様な改造巫女服。下はひざ上5センチのミニスカートを履いた、赤い髪を腰まで伸ばしたロングヘアの美女がそこにいた。

見た目は整っているが、服装により街にいると激しく浮くであろう。美貌と服装により周囲から集める視線は普通の美女に比べたら、段違いに多いだろう。

「不幸な顔をした君に神様からのクリスマスプレゼント」

女は笑みを浮かべている。

「どーも」

素っ気ない返事を返し受け取った。

「ね。君、絶望してるでしょ？」

「なんでそう思う？」

いきなり表れ、心の中を読まれたとしか思えない女の言葉に冷たい声で質問を返す。

「神だから。私の質問にも答えて、この世界に絶望してるんでしょ？」

笑みを崩さないで言う女。笑みを浮かべているが、翔太の瞳に映る女は冗談を言う様な女には見えなかった。親戚に騙される様な自分に見る目があるかは疑問だが、神だといわれ思わず信じてしまう程の不思議なオーラがある。

「絶望してたら、なにかあるの？」

「他の世界に連れて行ってあげるわ」

「それもいいかもな」

翔太は自称神の誘いにあっさり乗った。何もかもを無くした翔太には、この世界に未練は無い。翔太の返答に女は頷き、トランプ大のカードを差し出してくる。カードを受け取り見て見るも何も書かれていない。

「ちょっと指借りるよ」

右手をカードの上に置かれる。その瞬間、人差し指に痛みが走り、赤黒い血が一滴カードに付いた。だが、指には傷一つついていない。

「貴方の情報入れたわ。向こうに行ったら身体の中に入って貴方のステータスを勝手に記してくれるし、身分証明書がわりにもなるから、見たいときはステータスって言えば出るわ。じゃ、行つてらっしゃい」

ベンチに座っていた翔太を立ち上がらせ、女は力一杯その背中を押す。

すると、翔太の目の前の空間がガラスの様に割れ出来上がった穴の中に翔太は吸い込まれていく。

「なー、今から行く世界は楽しいか？」

「比べられないぐらい楽しいわ」

「そっか」

苦笑を浮かべ、翔太は完全に吸い込まれた。

「頑張ればね」

何かを期待する様に言った女の言葉は、翔太の耳には届かなかった。



暗闇の中で（前書き）

修正済み。

## 暗闇の中で

押し込まれるという表現がぴったりの方法で入った空間の割れ目。その中では見渡す限り闇だった。全身が入るとともに、割れ目から見えていた向こうの世界が消える。公園以上の静寂。ここを表現するのに適切な言葉は、漆黒だろう。光源のない暗闇の中に翔太はいた。

「今の俺の心の中が見れたらこんな色なのかな」

自虐的になりそんな言葉を口にしても、当然の様に誰からも答えは返ってこない。漆黒によち視界は利かないが、誰も居ない事は用意に想像がつく。もし誰か、もしくは何かがここで生きているのなら、何も音がしないのは不自然だろう。ここには自分しかない事を確認する為のつぶやきでもあった。反応は無く。やはり自分しかないらしい。

「ははっ」

乾いた笑いが自然と口からこぼれた。血のつながった者に騙され、今度は自称神にも騙されたのか。もしこの空間に死ぬまで閉じ込められるのだとしたら、間違いなく寿命を全うする前に、自害するだろう。例え自害をしなくても、狂うことは目に見えている。

「なにかおかしい事があったのか？」

まだ入ったばかりなのに狂ってきた様だ。幻聴が聞こえる。優しい声が聞こえた。聞こえてきた声は低い。性別はたぶん男だろう。翔太が知っている誰の声にも当てはまらない。

「聞こえているのか？」

優しい声は心配げな声に変わっている。辺りを見回すが誰もいない。やはり幻聴のようだ。俺はこんなにも優しさに飢えているのかと悲しくなる。

「ついに幻聴が聞こえてきたか」

「幻聴ではないぞ。ゆえあって姿はみせられぬがの。遅くなつてすまん。水先案内人のゲーテじゃ。さすがにこの空間で人を探すのは苦勞する。わしも歳をとつたものだ」

悲しさを誤魔化す為に出した声に、優しい声の主は謝罪の言葉をのべ、自分が案内人だと話す。依然、翔太の中では幻聴という認識は変わらなかった。せいぜい只の幻聴から、自分に優しく話かけてくる幻聴という認識に変わる程度。

騙され絶望し異世界に行くことと決意したため、軽い人間不信に陥っている。自称神の誘いに乗つたのも、何もせず、絶望だけしていても仕方がない、抜け出せるなら、悪魔の誘いにでも自称神の誘いでもいいからのってやるという投げやりな考えをしていたからだつた。

「聞こえているのなら大丈夫そうかの。幻聴じゃないと言ってもすぐには信じられないじゃろつて、話す事を頭の片隅にでも置いて置いて貰えればそれでいい。さて、現在そなたが向かっているのは、一言でいえばファンタジー世界というものだの。魔物が存在し、ダンジョンがある。また魔法も存在する。いつてしまえば、なんでもありの世界じゃて、成り上がるのも惨めに暮らすのも自分次第。ある程度人生のレールが決まっているそなたの世界とは違う。命をかける覚悟はあるかの？」

まだ幻聴だという認識だが、優しい声に問いかけられ、俺は迷わず答えた。この問いにはきちんと答えなければいけないと感じたから。

「人生を謳歌できるなら」

「・・・それならいいんじゃない。そろそろ着くぞい。わしからひとつ。贈り物をしよう」

優しい声は少しの沈黙のあと答えた。何かを迷っているようにも聞こえる。贈り物？姿も見せないのにどうやって？次は幻覚でも見え始めるのか？

翔太が疑問に思っていると、答えはすぐに形を伴って現れた。一切の光のない暗闇から、小さな光の玉が一つ現れる。大きなビー玉ぐらいの大きさの光は、翔太の胸にくっついたと思うと、吸い込まれていく。

ここでやっと翔太は幻聴でも幻覚でもないことに気づいた。なぜなら光の玉が入った胸は暖かい。そして何故かはわからないが、声の主が微笑んでいるように思える。それと共に頑張れと激励されているようにも感じた。

翔太がお礼の言葉を口にしようとする、暗闇が裂け、またその裂け目に吸い込まれはじめる。どうやらこの暗闇が女の言っていた世界ではなく、通路のようだったらしい。

「そなたの行く先に幸福がある事を願う」

「ありがとう！」

優しい声の主に届いたのか翔太にはわからないが、裂け目が閉じる寸前に大声で礼を述べた。翔太がいなくなった空間には再び静寂に包まれる。

「わしにできるのはこれぐらいか後はそなた次第だ」

翔太の境遇を女から聞いていて知っている声の主は優しい声音でつぶやいた。答えるものは誰も居ない。

## 乱入者（前書き）

変なところがあったらご指摘お願いします。

## 乱入者

お父さんが右手に剣を持ち、二匹の全身緑の魔物と対峙している。周りには青い体液を身体から撒き散らした同じ魔物の死骸が四つ転がっている。

お父さんと比べると、身長は低く短い手足。もうすぐ十歳となる私とさほど変わらない体軀から繰り出される殺意を伴う攻撃は、お父さんに無数の傷をつけ、確実に体力を奪い続けている。お父さんの動きは疲労により少しづつだが確実に鈍っていつているのが私にさえわかった。

六匹で私達を襲撃してきたゴブリンと呼ばれる魔物は、お父さんにより二匹にまで減っていた。だがやられたゴブリン達もただではやられず、大小無数の傷をお父さんに作った。普段通り馬車に乗っていたら、無傷で振り切れる相手だった。

私が道端に咲いている花に心奪われ、馬車を停めて貰わなければ、お父さんは傷を負わずにすんだ。ましてやゴブリンになんて襲われなかっただろう。

後悔の念が胸をしめつける。

花を見つけないければ。

馬車を停めると頼まなければ。

買い出しに付いていくと言わなかったら。

自分を責めてもゴブリン達が消えない事はわかっていても、自分を責める事しか出来なかった。街から遠く離れている為、助けを呼ぶ事もできない。馬車の後ろに隠れる事しかできない無力な私。悔しくて、悲しくて、何もできない自分の無力さに涙を流す。

お父さんとゴブリン達に動きがあった。二匹のゴブリンが、ゆつくりと距離を詰め始める。お父さんの顔に緊張がはしる。たぶん立っているのもきついのだと思う。

神様。もうわがままは言いません。これからはずっと良い子にすると誓います。ですからどうかお父さんを助けてください。

涙ながらに私は祈った。見晴らしがいいとは言えないが、近くに誰もいない事がわかるぐらいには視界が開けているため、誰かが助けにくる希望を容易に打ち砕かれた私には無駄だとわかっていても、神様をお願いする。目を瞑り必死に祈った。

「いつてー」

「グギヤー」

目を閉じていた私に、お父さんより高い男の人の声とゴブリンの悲鳴が耳に届く。急いで目を開けた私は、自分の目を疑った。疑わずにはいられない光景が映ったからだ。お父さんもゴブリンも目の前の光景に固まっている。

目の前の状況から考えるに、男の人が落ちてきて、ゴブリンにお尻で全体重をのせた一撃をプレゼントした様だった。周りには私の隠れる馬車しかないのに。どこから？

お尻の下に引かれたゴブリンは打ちどころが悪かったのか、ピクリとも動かない。

「お父さん!」



疑問は頭の隅においやり、私は急いで呼びかける。

私の声で硬直の解けたお父さんはゴブリンに駆け寄り、剣を振り下ろす。ゴブリンは青い体液を撒き散らし倒れた。

「お父さん。ごめんね」

馬車の影から駆け出し、勢いよく私はお父さんに抱きついた。服は所々破れ、血が滲んでいる。涙を流し抱きつく私の頭をお父さんが優しく撫でてくれる。

「過ぎた事は気にするな。フローラが無事ならそれでいい」

お父さんの言葉で、私の目からは更に涙が溢れた。

「まだ気を抜くのは早い。やつが何者かわからないからな」

お父さんが耳元で言った。お父さんの右手にはまだ剣が鞘に収められずに、握られており緊張しているのが伝わってくる。私はお父さんに抱きつくのをやめ、立ちあがる途中の彼に視線を向けた。

「なんだこいつ!？」

立ち上がりお尻の下にいたゴブリンを見てそんな事を口にした。気づくの遅いよ。

私は口には出さず、男の人を観察した。

綺麗な黒い髪をした男の人。中世的な顔立ちをしている。髪を伸ばしたら、女の人にも見えそうだ。お父さんより少し背は低く、コ-

トを羽織り、ズボンを履いている。服装は普通だが、見たことない生地で出来ている。

立ち上がった男の人は迷う様な素ぶりを見せた後、視線を向けている私たちの方に歩いて来る。

お父さんが右手に力をいれたのがわかる。何かあったら斬るつもりなのだろう。男の人がどうしても悪い人に見えず、武器も持っていない様に思えた。私はお父さんの右手を両手で掴む。私の意図を察したのかお父さんは剣を鞘に収めてくれた。

目の前まできた男の人は、着ていたコートを脱ぎ、中に着ていた服の袖を破き始める。予想外の行動に私達は戸惑った。お父さんも何をしてるんだこいつは？と彼のやる事を見ている。

「止血するんで、傷を見せてください」

そんな私達を見て、男の人はそう言った。

応急処置（前書き）

文才欲しい・・・

## 応急処置

自分が軽い人間不振に陥っている事など忘れ、翔太は血を流している男の状態を確認するため近づく。茶色い髪をした男と少女。瞳の色は二人共緑色だった。見た様子だと親子だろう。親を失う事を経験した翔太には、血まみれの親子を見て何もせずに立ち去るという選択肢は浮かばなかった。

「座ってください」

「ああ」

男は戸惑っている様だが、素直に座る。

翔太は座らせた男の身体を確認しようとするが、血で汚れているため傷口の確認がしにくい。翔太は破った袖で血を拭き取り男の傷を確認する。

左腕の傷からは少量ずつ出血が続いているが、他の傷は浅く出血は止まっているようだ。所々に出来た痣が痛々しい。

反対側の袖を破り、左腕の傷に圧迫止血を施す。医学に明るくはないが、命に関わるような傷には見えない。

だが所詮は素人判断。命に別状がないとは言いきれない。

「すまない」

されるがままにされていた男が申し訳なさそうな表情を浮かべる。意識はハッキリしているようだが、早く医者に見せた方がいいのは

間違いない。

「気にしないで下さい。ここから近い街にはどの位で着けますか？」

「馬車でなら、向こうの方に半刻ほどだ。だが何故だ？」

「貴方を医者に見せる為にですよ」

「いや、それには及ばない。少し休めばよくなるさ」

そう言い断る男だが、傷は休んでいても直ぐには塞がらない。休んでいる間にも血が流れ続けたら、きっと状態は悪化するだろう。

翔太はこんな状態の男をそのままにする気はさらさらない為、心配そうに二人を見ている女の子を見る。

「早く治療して、この子を安心させてあげてください。それに、もしまたあんなのが襲ってきたら大変です」

「・・・すまない。迷惑をかける」

少しの沈黙のあと男が折れた。

「いえ。じゃあ行きましょう」

翔太は手を差し出す、男がしっかりと握ったのを確認し、男を立ち上げらせ左肩をかす。

立ち上がった男は痛みに顔をしかめた。足や腕は痛がらなかった。もしかすると肋骨が折れているのかも知れない。

反対側には、治療が終わるまで心配そうに男を見ていた女の子が男を支える様に付き添う。

馬に運転手の乗るスペースをつけた大きいリアカーに見える馬車につくと、翔太は男を寝かせるスペースを作ろうと荷台にある皮袋をよせる。本来荷物を運搬するための馬車らしく、人が寝れるように作られていないのが見てわかる。怪我人には辛いだろうが我慢してもらうしかない。せめてなにか敷くものを探すが見当たらない。血で汚れるからと男は嫌がったが、翔太は着ていたコートを脱ぎ敷いた。何も無いよりは多少は楽になるだろう。男は横になると怪我のせいか疲れかはわからないがぐったりしている。

「あの・・・お父さん大丈夫ですよね？」

「大丈夫だから、お父さんについてあげてて」

横になっている男の横に座り、始めて声を出した女の子を安心させようと翔太は微笑み答える。

「うん。わかった。ありがとう」

流していた涙をぬぐい、笑顔でお礼の言葉を口にする女の子。

さて、どうしよう。

当然だが、馬車の操縦などした事がない。東京に住んでいた翔太は馬すら初めて見た。よくよく見ると馬に似た外見をしているが東部には短い角が二本生えており、若干馬とは外見がことなっているが、そこまで頭が回らなかったので、翔太の中では馬という認識である。

とりあえず、昔テレビで見たのを真似して見ることにする。手綱を軽く振ると馬がゆっくりと歩き出し、馬車が動き出す。アスファル

トで舗装されていない道は当然凸凹（いりこ）しており、それによって馬車が揺れたる。十メートルほど進んだところで手綱を手前に引つ張る。すると馬は歩みを止めた。どうやらこの方法でいけるらしい。

揺れがひどそうだけど、なんとかなるかな。

「少し揺れると思いますが、痛みが酷いようなら速度を落としますので言ってください」

男は無言で頷いた。

「お父さんがつらそうだったら教えてくれるかな？」

念の為女の子にも声をかけておく。男は痛みを我慢して言わない可能性もある。

もし骨が折れていたりしたら、悪化するかも知れない。

「はい。わかりました」

女の子の声に頷き、先程と同じぐらいの強さで手綱を振る。最初から強く振ると馬が一息に加速するかもしれないので、徐々に強くしていく。馬が次第に速度を増し走り始める。男の姿を確認するが顔に出るほど痛みは感じていない様子に安心する。逸る（はや）気持ちを落ち着かせる為に、翔太は手綱を強く握り締める。三人を乗せた馬車はゆっくりだが確実に街に向かっていった。

## 迷宮都市（前書き）

見切り発車感が…。誤字脱字あったら報告お願いします。



## 迷宮都市

馬車に乗って四十分ほど進むと、建造物が視界に入る。注意してみると高い壁に囲まれている街のようだ。街の規模は遠目からも広いのが伺えるが、中の建物はほとんど壁の影にはいつてしまっているようだ。

あと十分も馬車に揺られれば着くことができるだろう。幸い道中、魔物に襲われる事はなかった。だが男の容態に気を使い馬車の速度を抑え進んでいたため思ったよりも時間が経過していた。

「あそこでいいんだよな？」

翔太の問いに少女は男から視線を外し前を向いた。

「はい。あそこが私達の街です」

「了解」

街道沿いに進むと大きな門があり。四人の兵士が立っていた。翔太は手綱を引き馬車を止める。すると金髪の背の高い鎧の上からでもマツチヨとわかる兵士と、頭に茶色い犬耳の生えた兵士が近寄ってきた。

「これは、ゴッソ・リーデルの馬車だな。なぜ君が乗っている？」

犬耳の兵士が険しい表情を浮かべる。マツチヨな兵士は既に抜刀していた。明らかに警戒されている。荷台に乗っている男はゴッソとらしい。

「この馬車の持ち主は怪我をしていて荷台で休んでる。早く医者に見せたいんだ」

「確認させてもらっ」

剣を鞘に収めマツチヨは荷台の方に歩いていく。その時間さえもどかしく感じる。

「このぐらいなら大丈夫だろう。任せろ」

マツチヨは荷台にいくと寝ているゴツソの姿を確認すると、両手を合わせるようにゴツソの身体の上に置く。

「ホレアンさん」

どうやらマツチヨと女の子には認識があるらしい。マツチヨは名前を呼ばれ女の子に笑顔を大丈夫だと伝えるように笑顔を向ける。状況が状況だけに翔太は口には出さなかったが。正直、このマツチヨに笑顔が似合わないと思った。

「わかつただろ？早く医者に見せたいんだ。通らせてくれないか？」

「なんで医者なんだ？医者は病気の時に行くところだろう。ホレアンはああ見えて治療士だ安心しろ」

犬耳の兵士はなにをおかしな事をといった目で翔太を見た後、ああと頷き何かに納得したようにそう話した。

あの外見で治療士<sup>ヒーラー</sup>かよ。治療士<sup>ヒーラー</sup>つてあれだろ？なんか不思議な術で身体癒したりするあれだよな？パーティーメンバーに守られる身体的に恵まれないイメージだったんだが。あのマツチヨは見るからに先頭にたつて切り込むタイプだろ。魔物に笑いながら突っ込んでいきそうだ。

翔太はそんなことを考えながら、マツチヨの行動を見守る。

「<sup>かのもの</sup>彼者に癒しの光をヒール」

マツチヨの手が発光し、光がゴッソを包み込む。光はゴッソの傷にあたると傷口とともに消えた。

「もう大丈夫だ」

体育会系スマイルで女の子の頭を撫でるホレアン。

「ありがとうございます。お父さん」

「んん。迷惑をかけた」

お礼をいい女の子がゴッソに抱きつくと、ぐったりしていたゴッソは上半身をゆっくりとあげる。その光景に胸が暖かくなる。

「俺は治療しただけだ。礼ならその男にいいな」

ホレアンに言われ、ゴッソは翔太の方を向く。

「君には本当に世話になった。よければお礼がしたい」

ゴッソは立とうとするが血が足りないのか、ふらついている。

「無理しないで休んでいてください。このまま家まで送ります」

「フローラすまないが道案内を頼む」

女の子はフローラというらしい。小さく頷くと翔太の横に腰掛ける。

「リーデルさん。傷は治った。だが失った血はすぐには戻らない。しばらくは安静にしておいてくれ。君、馬車を出しても良いぞ」

ゴッソに声をかけた後、ホレアンは翔太に通行の許可を出す。

壁に囲まれている割にチェックは甘いらしい。ゴッソと一緒にいるにしたって始めてきた翔太に何も言わないのは何か事情があるのだろうか？

今は気にしてもしようがないか。

ゴッソを早く休ませるため、疑問を頭の隅においやり、ホレアンの言葉に頷く。

馬車を動かすため、手綱を軽く振り馬をゆっくり歩かせ出す。

「ようこそ迷宮都市オリガントへ」

ホレアンが大きな声が背後から聞こえた。やはり体育会系らしい。そして翔太がここに初めて訪れたことにも気づいていたようだ。ホレアンに手を振ったときに背後にいた犬耳の兵士は苦笑していた。

## 恩返し

どこが迷宮都市なんだ？

今は、女の子もといフローラの案内に従いながら馬車を進めている。迷宮都市と言われたので迷路の様に道が入り組んでいるのかと思っ  
ていたらそうではないらしい。門から続く道は大通りなのだろう。  
馬車が二台は並んで通れそうに見える。

大通りから伸びる道の幅も大体が馬車一台通れるぐらいの広さにな  
っており、よく整理された街並に見えた。都市というだけあり、沢  
山の人が行き交っており、商人や買い物客などの声がひっきりなし  
に聞こえ、栄えているのがわかる。

「ここです」

「ああ」

フローラの案内で到着した馬車は大きな看板がついた木造の建物だ  
った。

裏に馬車を止めると、フローラが荷車から馬を離す。ゴッソは荷台  
から立とうとするがまだ一人で立つのは辛そうに見えた。

「手を貸します」

「助かる」

ゴッソを肩担ぐように支え裏口から建物の中に入る。

「お母さん呼んで来る」

「ああ、頼む」

後から入ってきたフローラが廊下を駆けていった。

「どこか横になれるところがありますか？」

「こっちの奥に寝室がある」

フローラを見届けた後、ゴッソの案内で建物の中を進み、寝室にゴッソを寝かせる。大きなベッドがあり、整理整頓という言葉が似合う綺麗な部屋だった。

「連れてきたよ！」

勢いよく扉を開けたフローラに続き、フローラを大きくした様な女性性が部屋に入ってくる。

「ルアン・リールデルです。話はフローラに聞きました。夫と娘がお世話になりました。もし貴方がいなかったら、この宿屋は潰れていたでしょう。ありがとうございます」

頭をさげ、お礼の言葉を口にする女性。美人に頭を下げてお礼を言われると照れることを翔太は学んだ。

「いえ。当然のことはただけです。でわ、失礼します」

「まちたまえ。君さえよければしばらくここに泊まっていきなさい。この街にきたのは初めてだろう？知らないことは教えよう」

翔太が部屋を出て行こうとすると、ゴッソが引き止める。無一文の翔太にとっては願っても無い申し出だ。

「でも、俺お金持ってなくて。なので遠慮します」

「恩人から金とはらん好きだけいてくれて構わない」

お金の事で嘘をつきたくない翔太は素直に所持金がない事を話すが、ゴッソは引き下がらなかった。

「お兄ちゃん行っちゃうの？」

「お父さんがあそこまで言ったらきつと居てくださるわ」

フローラの問いにルアンは笑顔で答えている。

さすがにここまで言うてくれている人の申し出を無下に断るのは気が引けた。

「わかりました。一いちそつ双翔太しょうたです。しばらくお世話になります」

ゴッソはうんうんと頷き、ルアンは優しい笑みを浮かべ、フローラは見るからに喜んでるのが感じられた。一家の優しい反応に翔太は目頭が熱くなるのを感じる。

「よかったわねフローラ。一階の開いてる部屋に案内してあげて。あと、お父さんの古い服もっていきなさい。終わったらすぐ戻ってお手伝いお願い。」

「うん。わかった！翔太お兄ちゃんこっちだよ」

笑顔のまま歩くフロアに続く。案内された部屋は、入り口からはいつて一番最初にある部屋だった。

大きさは八畳といったところか、一人で使うには広めである。

「いいのかこない部屋つかっちゃって？」

「うん。好きなように使って大丈夫だよ。それと、これ着替えね。じゃあ、夕食までゆつくりしてて。私お手伝いしなきゃいけないから行くね。夕食できたら呼びに来るから」

翔太はいろいろ聞きたいことが合ったが、フロアはそういうとすぐに部屋を出て行ってしまった。手持ち無沙汰になった翔太は用意してもらった服に着替る。着替える最中とあることに気づく、すっかり忘れていたが翔太の服にはゴツソの血が少なからず付いている。兵士に止められるのも当然だ。コートには服以上に血がべっとりとついており、もう着ることはできないだろう。着替えをすませ、ベッドに横になる。

「そつえばまだ見てないな。何が書いてあるんだろう」

不意に、こちらに来る前に改造巫女服の自称神を名のる女に渡されたランプ大のカードの事を思い出すが、なれない馬車の運転で疲れたのか翔太は眠りに落ちていった。



## 迷宮都市とは

身体を揺さぶられる感覚がする。母さんが起こしに来たのだろうか？

「もう少しだけ寝かせてくれよ」

身体を揺さぶる手を払いのける。

「じゃあ少しだけですよ」

優しい声が頭の上から振ってきた。母親より少し高い声だ。身体を起こす。

まだ覚醒しきっていない頭を軽く左右に振る。

ここは俺の世界じゃない。

母さんはもうどこにも居ない。

目を開けると若い女性がいた。茶色い髪を背中まで伸ばし、赤い瞳をした優しい顔つきの女性。気のせいかも知れないが子供が悪戯を成功させた時の様な表情を浮かべているように見える。

「ルアンさん。すみません。寝ぼけてました」

自分の顔が赤くなっているのがわかる。羞恥で心臓が爆発しそうだ。

「いいのよ。あなたもこの子も疲れてたんでしょう」

笑いを堪えているようにも見える顔を向け、ルアンは翔太の横を指

差した。

どうやら本当に笑いを堪えていたらしい。

何やら暖かい物があつたのには気づいていたが、ルアンの指差すほうに翔太は視線を動かし固まった。詳しくいうと暖かい物の正体を視界に捉えて翔太は固まった。

「起こしに行った子が寝ちやうなんてね」

そこには猫のように丸くなりスースーと寝息をたてるフローラの姿。

「すみません」

急いでベッドから起き、悪い事をしていないのに翔太は謝った。

「いいのよ。フローラ起きなさい」

ルアンは優しくフローラの身体を揺する。

「うーん」

眠そうに目を擦りながら起きるフローラ。髪に綺麗な髪には寝癖が付いており、先程みた時より幼く見えた。ルアンと翔太を交互に見ると、頬を赤く染め、逃げる様に部屋から飛び出して行った。

「あの子があんなに懐くなんて珍しいんですよ?」

「そうなんですか」

「ふふつ。いじめすぎましたね。私達もいきましようか」

ルアンはそう話すと部屋をでていった。フローラと翔太の反応に満足したのだろう。

やっぱり。途中から気づいてましたよ。

肩を少しだけ落とし、翔太はルアンに続き部屋をでる。

「あの、この街ってなんで迷宮都市なんですか？」

「あら？知らないできたの？」

「はい」

「この街はダンジョンに居る魔物のおかげで繁栄してるからね。ダンジョンで繁栄してるところは、みんな迷宮都市よ」

RPGかよ！

「それなりに稼げるみたいよ。ま、死ななければだけどね」

「街を囲う壁はダンジョンから出る魔物を外に出さない為ですか？」

「それは違うわ。ダンジョンの魔物はダンジョンの外に出れないの。出ると消えるわ。あの壁は外の魔物から街を守るものよ。さっ着いたわ。フローラの横に座ってくださいね」

まだからかうつもりなのか、この人は。

ルアンに促され、翔太は小さくため息を吐き、まだ頬を赤く染めて

いるフローラの隣に腰掛けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8233z/>

---

異世界日記（仮）

2011年12月29日22時48分発行